

2019年2月17日

課程による博士学位請求論文の審査報告書

早稲田大学大学院
経済学研究科長 小西秀樹 殿

報告者 大塩量平（早稲田大学政治経済学術院助手）
学位請求論文題名 近代ウィーンにおける劇場市場の形成——社会経済史的分析

主査 川口 浩（早稲田大学政治経済学術院教授）
副査 鎮目雅人（早稲田大学政治経済学術院教授）
副査 鈴木健夫（早稲田大学名誉教授）
副査 山之内克子（神戸市外国語大学総合文化教授）

審査結果

上記学位請求論文に関する公開報告会が、2019年2月14日、経済学研究科長小西秀樹教授司会の下、開催された。出席者は、主査・副査3名・矢後和彦教授（早稲田大学商学学術院）・経済学研究科博士課程院生3名であった。

審査員は全員一致で、下記の通り、論文本体・当日の口頭報告・質疑応答・中間報告における修正要求への対応等を総合的かつ慎重に審査した結果、同学位請求論文が博士学位に相当するものであると判定した。

記

1. 提出要件の充足状況

上記博士学位請求論文の主要な基礎となっている公刊論文・学会報告は下記の通りであり、提出要件は満たされているものと判断される。

- (1) 「18世紀後半ウィーンにおける『劇場市場』の形成——宮廷劇場会計史料による需給分析」, 『社会経済史学』(77-4, 2012) (査読付) (本論文第3章第1・2節に対応)
- (2) "Exklusives Logenpublikum. Die Abonnements des Hochadels am Wiener Hoftheater in der Ära Josephs II"., *Österreich in Geschichte und Literatur mit Geographie* (55-1, 2013) (査読付) (本論文第3章第3節に対応)
- (3) 「18世紀ヨーロッパにおける消費の一断面——イギリスおよびドイツ語圏における『文化の商業化』の議論をめぐって」, 『経済研究』(大東文化大学経済研究所) 30, 2017 (査読なし) (本論文第1章第2節に対応)
- (4) 「18世紀後半ドイツ語圏における舞台芸術家の『雇用市場』の生成——ウィーン宮廷劇場の俳優の社会的地位と雇用条件の事例分析から」, 『社会経済史学』(84-3, 2018) (査読付) (本論文第4

章第2節1項に対応)

(5) 国際シンポジウム (History of Consumer Culture, 2017) での英文報告 (査読なし)

(“Theatre-going as a consumer culture: A socio-economic analysis of audience in the Viennese theatres in the late 18th century”, 報告集公刊, 2018) (本論文第3章第3・4節、および第6章第2節に対応)

2. 国際的評価

第18回世界経済史会議 (XVIII World Economic History Congress, 2018) においてポスター最優秀賞 (前近代[Pre-Modern]部門) 受賞。

3. 博士学位請求論文の構成と概要

(1) 博士学位請求論文の構成は以下の通りである。

はじめに——問題意識と着眼点

第1章 本研究の分析の枠組み

第2章 18世紀後半ウィーンとその劇場制度

第3章 聴衆の諸相——消費段階

第4章 劇場の「舞台裏」——宮廷劇場にみる生産段階

第5章 劇場の経営——宮廷劇場の経営

第6章 ウィーンにおける劇場市場の形成

第7章 結論

文献リスト

分量はA4版205ページ (27万字超)。

(2) 各章の概要は以下の通りである。

「はじめに」においては、従来の経済学・経済史研究では人間社会の「物質的豊かさ」が重視されてきているが、もう一つの重要な豊かさである「非物質的豊かさ」については論じられることが少なく、本論文はその「非物質的豊かさ」の形成過程を、18世紀のウィーンの舞台芸術を対象とし、従来のように人文学的分析ではなく、需要と供給の経済学・経済史的分析によって解明し、そこに近代的な一種の市場取引の実現過程がみられたのでないかという、本論文の歴史的検証の目的が指摘されている。

「第1章」においては、上記の歴史的検証の直接的な先行研究がないなかで、それでも本論文に有用な研究があることが指摘され、それらについて検討が加えられ、最後に、本論文の分析の枠組みが提示されている。有用な分析だと考えられるのは、一つにはアメリカの経済学者シェラー (Scherer, F. M.) の研究 (2004) であり、彼は、17-19世紀ヨーロッパの作曲活動における「パトロネージ指向 (特権層による生活保障と引き換えにその注文による作曲)」から「市場指向 (不特定多数を対象とする自由な作曲)」への進展を見出した。二つ目にはイギリスとドイツ語圏の最近の学界にみられる消費文化史研究の成果 (とくにブルーア Brewer J. とノルト North, M.) であり、そこでは工業化・経済成長に伴う文化消費の拡大とその社会的・経済的背景、文化消費の職業化・商業化、文化消費における啓蒙思想の影響等が議論された。学位請求者は、こうした先行研究を踏まえ、文化の商業化・市場化の実態のさ

らなる解明の必要を説き、とりわけ芸術は、生産（創作、供給）の経済的在り方が未解明であるがゆえに、消費（鑑賞、需要）の歴史的役割を生産との関連で解釈することができず、文化の商業化の実態はあいまいなままにされていると問題提起する。そして、学位請求者は、本論文の最重要な課題は、18世紀後半のウィーンにおける舞台芸術（劇場）活動を対象とし、舞台芸術を供給サイドと需要サイドから統合的に分析し、そこに近代社会経済の市場取引の進展を見出すことにありと明記し、各章の検討事項を説明する。

「第2章」においては、第1章に明記した本論文の最重要な課題の分析の前提とも言うべき課題、すなわち18世紀のハプスブルク国の首都であったウィーンの劇場制度・政策の歴史的推移が既存の研究の分析に依拠して検討され、そこに顕著な改革があったことが指摘される。カール6世（1685-1740、在位1711-40）の治下にあつては、劇場活動の制度化（宮廷機関の設置）がなされ、宮廷劇場（レオポルド劇場）でのオペラ・バレエの上演は、皇帝の芸術的愛好心を満たすだけでなく、広大な各領邦の高位貴族を劇場に招くことによって政治的国家統合・皇帝権強化に資するという意図があつたといえ、他方、ケルトナートア劇場を中心とする、政治的風刺をも含む民衆劇場の演劇は警戒され規制された。次のマリア＝テレジア（1717-80、在位1740-80）の治世には、オーストリア継承戦争（1740-48）で弱体化した国力を増強する諸改革の一つとして、劇場改革が実施された。宮廷の秩序維持と民衆統治を実現するために、新たなブルク劇場を中心とする宮廷劇場の上演を一般都市住民に開放し、民衆劇向けのケルトナートア劇場を宮廷劇場化するとともに、民衆劇についてさまざまに規制し、劇場活動を宮廷の管理下に置き、民衆の啓蒙主義的な道徳向上を促そうとした。ただし、夫の神聖ローマ皇帝フランツ1世（1708-65、在位1745-65）の死去後はマリア＝テレジアは劇場の直接的管理からは身を退き、劇場運営は特許制となり、失敗が続いた。そして、その後のヨーゼフ2世（1741-90、在位1765-90）は、地方の貴族勢力を排除して皇帝権力を強化し、人民のために国家を繁栄させることを目指し、諸改革を実施したが、そこには特権階層と都市住民の平準化の考えがあり、娯楽政策および劇場政策における彼の根底的な改革はその諸改革の重要な柱となった。彼は、宮廷所有劇場の一つであるブルク劇場を「ドイツ国民劇場」に改組し、劇場経営の効率化・全階層の劇場入場許可・市内の劇場活動の自由化（常設民間劇場の承認）を実施したが、本論文では、この画期的な改革により市場指向の劇場活動が展開する制度的変化があつたことが確認されている。

「第3章」においては、ヨーゼフ期のウィーンにおける劇場活動が消費の側面から、すなわち聴衆の側から詳細に分析され、そこにみられる需給（劇場側と聴衆）の関係の実態が考察される。具体的に記せば、劇場の演目と入場者の社会階層の変化の関係の歴史的趨勢が明確にされ、そこに大きな変化があつたことが論証されている。直接的史料がないなかで、本論文で使用される史料は宮廷劇場の会計報告書であり、その綿密な分析から、宮廷劇場の入場者数の趨勢と入場者階層（高位貴族と一般層）の変化および演目ジャンルの変化が析出されている。それによると、ブルク劇場が国民劇場化（1776/77年度）する以前はフランス演劇やイタリアオペラの上演と高位貴族の入場が主体であつたが、それ以後には、まずはヨーゼフ期前期（1783/84年度以前）にはドイツ語の演劇・オペラが主流になり、一般層の入場が顕著に増加し、後期（1783/84年度から1789/90年度）には、イタリアオペラの進出と入場者における高位貴族の増加・一般層の減少がみられ、そうした一般層が民間劇場に吸収されたことが解明された。ここにおいてウィーンでは、学位請求者によれば、高位貴族と一般層の聴衆が参加するなか、宮廷劇場と民間劇場は棲み分け・競合し、劇場活動（需給関係）は拡大し、舞台芸術の消費段階は自由な市

場指向になっており、この傾向はとりわけヨーゼフ期後期にさらに促進され定着した、と確認されている。なお、本章においては、高位貴族と一般各階層による観劇の実態と経済的背景についての検討も加えられている。

「第4章」においては、第3章と同じくヨーゼフ期（14年間）とレオポルト2世（1747-92、在位1790-92）期（2年間）の16年間を対象とし、宮廷劇場の会計報告書の支出部門（人件費、舞台装飾関連費等々）の分析により、同劇場の供給すなわち上演活動を支えた生産段階の取引（需給関係）が検討される。この生産段階の取引には、具体的には、実演芸術家（俳優、歌手、オーケストラ楽員）との出演/雇用契約、作家（台本、作曲）とのコンテンツ（台本、音楽）調達取引、劇場運営作業員等の雇用契約（以上の常勤被雇用者の人件費が劇場の総支出の半分から3分の2）、舞台装置・衣装等の資材調達の取引（総支出の3割程度。商工業者等が相手）などがあるが、論文では、それぞれについて詳細な分析が行われ、第3章で解明された劇場活動の消費段階を支える生産段階の実相（仕組み）が考察されている。身分制的制約から脱しつつあった俳優・音楽家は劇場と自由な雇用関係（市場指向の取引）を結ぶことができるようになっていたが、ドイツ語演劇俳優の場合、先の16年間に会計報告書の俸給簿から情報の明らかな約60名の出自、経歴、契約交渉・解消をみると、そこに他都市との競合関係があるなかで、劇場・俳優いずれもの自由取引・「雇用市場」が成立していたことが確認される。同じ傾向はイタリアオペラ歌手、ドイツ語オペラ団員、オーケストラ奏者についてもいえ、学位請求者はそれぞれについて、彼らの経歴、契約交渉（リクルート）の分析から、未成熟の面もあったものの市場指向の取引が生成していたことを、論証している。他方、資材調達の面でも、学位請求者は、衣装部の実態的事例（1776/77、1791/92年度）を紹介し、当時の被服関連産業の成長を背景に、劇場と被服関係営業者との自由で多彩な取引があったことを確認している。加えて本章では、コンテンツ（台本・音楽）の調達の在り方が具体的事例を示しつつ紹介されている。

「第5章」においては、第3章の消費側面（需要）と第4章の生産側面（供給）の分析から明らかな市場指向の取引にあって、宮廷劇場は実際にはどのような経営を行っていたか、を検討する。経営は、高位貴族と都市住民に「聴衆の満足」および「良質なドイツ語舞台作品の安定的な提供」を意図したヨーゼフ2世と宮廷劇場監督局によって行われたが、学位請求者は、劇場監督局の組織、事業（主催定期公演・舞踏会・宮廷行事特別上演・皇帝付き室内楽団の開催）、14年間の収入内訳（当日券売上・予約料・舞踏会等々）、当期利益を検討し、劇場経営の推移を、その背後にあるその時々の劇場内外の諸事情（劇場の支出動向、皇帝の姿勢・指示とその背後にある国際的政治情勢等々）を説明しながら、解明した。それによると、当初の1780年代初めころまでは新しい需要層（一般層）の拡大があり、当期利益は増加していたが、その後はドイツ語演劇・ドイツ語オペラ・イタリア語オペラの三ジャンル同時上演の政策導入等により、当期利益は赤字化し、経営は悪化していく。しかし、それでもヨーゼフ期の宮廷劇場は、学位請求者によれば、ヨーゼフの方向性に従いつつ上演者の意思決定をも認め、経営はそれ以前の混乱を修復し、長期にわたり持続的で良質な上演活動を行い得たのであり、ヨーゼフ自身は収入増加にかかわらずわなかつたものの、劇場はパトロネージ指向を脱したことは確かだ、ということができる。

「第6章」においては、18世紀末のウィーンでは、以上の章で分析・検討してきた宮廷劇場に加えて民間劇場が増加し、とりわけドイツ語演目をめぐって複数の劇場が自由に棲み分け・競合し、不特定多数の聴衆が自由に観劇するようになる状況が生まれ、同都市には「劇場市場」が生じていたと主張され

る。そこでは「娯楽的観劇」だけではなく「文化消費的観劇」もみられ、「文化消費的聴衆」の形成があった。こうした主張のために学位請求者は、劇場設立の自由化（1776年）を踏まえた1780年代後半の常設民間劇場の増加動向を、レオポルトシュタット劇場やアウフ・デア・ヴィーデン劇場その他の劇場の事例を示しつつ紹介し、民間劇場の経営の実態を説明し、宮廷劇場と民間劇場の比較（劇場規模、入場料、オーケストラ、俳優・歌手の人数、ドイツ語ジャンルの上演内容と上演回数）を検討し、同時代の文献や最近の研究を批判的に検討している。

「第7章」においては、以上の諸章の分析を踏まえ、結論として、以下のような主張が記されている。18世紀後半のヨーゼフ期の劇場活動には、制度改革（劇場設立の自由化）と供給の在り方の拡大（宮廷国民劇場のみの段階から民間劇場の参入）により、聴衆である高位貴族・一般層の需要は拡大し、宮廷劇場・民間劇場への各需要層の自由な流動的行動がみられた。劇場は消費段階と生産段階で自由な市場取引を行うことになり、パトロネージ指向の需給関係から市場指向の需給関係へと変化し、需要層・供給層が一体化して「劇場市場」が形成された。そこでは、伝統的な劇場鑑賞者（社交、単なる娯楽）ではない「舞台の消費者」「文化消費的聴衆」が生成され、それによって、現代にまでつながる近代ウィーンの舞台芸術の隆盛の重要な基盤が形成されたのである。

4. 本博士学位請求論文に対する審査員の評価

本論文は、18世紀後半（とくに1776-1790年のヨーゼフ2世期）のウィーンにおける劇場経営の問題を、文化消費研究に関する従来の研究史の流れを押えつつ、経済史的観点から位置付けようとする研究である。近代における資本主義的市場経済の起源を探る研究は数多いが、既存研究の多くは財の生産や金融の側面に焦点をあてたものであり、文化的サービスの生産と消費に正面から取り組んだ研究は少ない。この分析視角の斬新さを本論文の第一の特徴として挙げることができよう。

具体的には、本論文では、ウィーンの宮廷劇場の経営記録を中心とする一次史料を詳細に分析することにより、18世紀後半の皇帝主導の改革を受けて、俳優や歌手、楽団員等が、特権階級（パトロン）の個人的庇護を受けつつこれに隷属する状態から、自らの技芸を消費者（需要者）としての観客に供給する自由な生産者として行動するようになったこと、他方、興行主としての劇場の経営も、皇帝の権威を示すための手段から、採算を維持しつつ消費者（観衆）の評価を高めることで事業としての成功を目指す資本主義的なものに移行したことを論じている。本研究は、（産業革命に先立つ）消費革命に関する近年の研究を発展させるかたちで、経済史ならびに経済学に新たな視点を提供するものであり、この点での学術的貢献は高いものと考えられる。

また他方、社会史的視点からみれば、ヨーロッパのなかでも屈指の演劇都市であるウィーンの劇場経営の歴史研究は、現地においても演劇・戯曲研究が盛んで、先行研究の幅も非常に広いが、多くは文学的・美学的な立場からなされたもので、公文書をもとに経営サイドの会計、収支の記録にまで踏み込んで経済的側面から考察するような研究はほぼ皆無と言っていい。その意味で、本論文は極めてユニークであり、ウィーンの演劇史研究に全く新しい視野を切り拓く可能性を秘めているといえるであろう。

5. 中間報告会参加者による修正要求に対する対応

2018年12月21日に開かれた中間報告会では、下記（1）～（12）の、短期的および中長期的に改善すべき修正要求が出された。これに対する学位請求者の対応（⇒）は、以下の通りである。

(1) 「中世」「近世」「近代」等、時期区分の目安と妥当性について考える必要がある。

⇒時期区分については、原則として、世紀での表記に変更した。なお、ウィーンの劇場ないし舞台芸術を経済史的に扱う際の時代区分に関しては、より長期的な経済史通観が必要であるため、今後の課題とする。

(2) 「民間」あるいは「市民」の категорияが文化政策や市民層の動向によって可変的である点を踏まえ、「上層市民」「下層民」といった社会的階層の区分を明確にする必要がある。

⇒市民のうち「上層市民」「中産市民」の定義は既に第3章で整理してあるが、「高位貴族」と「下層の観衆」の意味については、第3章で新たに明確化した。

(3) 当時の人びとの観劇行為からすれば「聴衆」ではなく「観衆」という用語を使用すべきではないか。

⇒当時の観客は耳で聞くことよりも、まず目で見て楽しむことを主としていたので、「聴衆」という表現を止め、「観衆」に統一した。

(4) 通貨単位の表記（カタカナか、記号か）を統一する必要があり、また複数通貨単位の関係性に関する簡単な説明（初出時に脚注で触れる）の必要がある。

⇒通貨表記は、本文中ではすべてカタカナ表記（「グルデン」「クロイツァー」）とし、図表では略号（「fl」「xr」）を用いた。相互の関係については、グルデン初出時に、第3章51頁脚注9で説明した。

(5) 第4章（生産段階の議論）のまとめになる節（小括ないし総括）が必要である。

⇒第4章に末尾に「総括」を挿入した（147-148頁）。

(6) 第7章（結論）で、最も重要な著者の主張である「演劇文化の市場化と消費化のプロセス」と「結果的に不特定多数の聴衆を生み出した」という動きとの相関関係をもう少し深める必要がある。

⇒以下の2点を第7章のなかで論じた。

- ・競合の進展によって各劇場がそれぞれ多様で独自の上演を工夫し、その結果、観衆にとっては多彩な観劇の選択肢が提示されることになったため、人々は上演内容の差に注意するようになった。
- ・上演内容の差異が重要になった結果、社会層ごとに大きく異なっていた鑑賞以外の行動（社交や飲食その他）の重要性が相対的に後退し、そのことによって、観劇先・観劇スタイルの社会層別の差違が縮小した。そして人々は、観劇の際に上演内容の相違に基づき観劇先や観劇スタイルを柔軟に選べるようになり、そうして社会層による区分がない不特定多数の観衆層が生成した。

(7) 貴族層が劇場の高級席を競って購入するようになったことについて、そもそも劇場の高級席は従来は世襲の恩賜だったことを強調しておかねば、いきなり市場メカニズムが導入されたかのような印象を与えてしまう。

⇒第3章で以下の点を説明した。

- ・カール6世期までは、宮廷劇場の席は宮内長官によって各貴族の宮廷社会における地位に応じて割り振られていた。
- ・テレジア期に、宮廷劇場の運営が興行人に委託されるようになると、席は広く販売されることとなり、貴族もそれらの購入を受け入れるようになった。
- ・ヨーゼフ期もテレジア期のあり方を踏襲した。

(8) 文化的活動には、一般的な財のような「需要と供給」「生産と消費」といった二分法では割り切

れない面がある。創作者は取引を通じて金銭的対価を得ることだけでなく創作自体の喜びを求めても活動しており、観客も受け身の立場で上演を受け取るだけでなく、その場・事後的に反応・論評することでも満足を得ている。このような芸術や文化に関する活動を、「市場」における「需要と供給」ないし「生産と消費」という図式に当てはめることの意義についての検討がさらに必要である。

⇒「はじめに」と第7章で以下の点を述べた。

- ・芸術と社会の関係は当然、経済学的な需給や市場取引の考え方で把握され切れない。
- ・だが、芸術活動は芸術面と共に政治・経済・社会の各面での人々からの評価によっても維持拡大してきたものであるため、本論文は経済学的なあり方に着目する。
- ・とは言え、芸術の経済学的なあり方が明確化すれば、それを基にしつつ他の視点を取り入れ、より多角的の議論を展開することが可能になる。

(9) 「パトロネージ指向から市場指向」への変化によって、劇場改革以前と以降で、特に「パトロネージ」のどのような点が変わったか。このことを簡単で良いので記述する、少なくとも著者がこの点を意識していることを示す必要がある。

⇒以下の通り、18世紀ウィーンにおける劇場の状況に即したパトロネージ指向と市場指向の定義を第2章で述べ、それを踏まえて、第5章と第7章でヨーゼフの改革後の前者から後者への変化については論じた。

(1)パトロネージ指向の劇場：

- ・君主が自らの必要のために劇場を設置し、支配者としての強制力をもって劇場運営者ないし上演者を確保し、彼らに慈悲として活動機会と庇護を与え、また他方、運営者および芸術家は君主に奉仕すべく上演活動をする劇場。
- ・さらに、君主が自らの望まぬ状況が生じるのを防止するため、不特定の劇場運営者ないし上演者の自由な活動を禁じた上で、特定の劇場運営者にのみ上演させ、その利益を自らのものとするを許すことも含む。

(2)市場指向：

- ・劇場の運営・上演の自由が認められ、その意欲・技芸や資金等を持つ者が自由に劇場活動に参入し、いかなる者に対しても自由な上演を行うことが許され、また人々は対価を支払えばいかなる劇場の上演も享受しうる状況。

(10) 同時代人の日記・書簡・旅行記等の一次史料を分析し、その結果を本論文での数値的データと照合し、当時の「観劇」のリアルな姿により接近することができるのではないかと。

(11) ウィーンにはドイツ語を用いた長い「笑劇」の伝統があり、これが19世紀のオーストリア国民演劇につながっていくという文学史の流れがある。「ドイツ語劇」をセリフの言語でざっくりと分けるのではなく、その内容をもとにさらに細分化し、宮廷劇場、民間劇場に通った各社会層、さらには「不特定多数の観客」の「趣味」の問題に迫る必要がある。

(12) ウィーンの宮廷劇場の黄金時代は19世紀半ばにあり、それに連なる前段階としてのヨーゼフ期の状況をより明確に論証すべく、今回の経済的分析に社会史・文化史的手法を取り入れ、観衆や俳優の社会的位置・価値をより明確にすべきである。

⇒(10) (11) (12)については以下のように考え、第7章に反映させた。

- ・本論文は、舞台芸術の拡大浸透を促す経済構造の生成を解明することが主目的であるため、そうし

た仕組みの定着によって、人々が実際に文化的な豊かさを如何に実感したかという点を解明することは今後の課題となる。

- ・観劇に市場取引の仕組みが生まれたことで上演内容が多様化し、人々は上演内容への嗜好をより明確化させた。本論文では観劇行為・観劇先の多様化に議論の重点を置いたが、舞台芸術への様々な嗜好とそれに応じた観劇行為の具体的な様相については明確になっていない。しかし舞台芸術が19世紀以降現代にまでウィーンで盛んであることを長期的に考察するためには、これらの点は深く議論する必要がある。それには、ウィーンの劇場に來場した同時代人の言説を体系的に分析する必要がある。また、その際は単に上演内容への評価だけでなく、俳優への様々な評価（上演内容だけでなく、俳優の社会的地位その他の評判など）も分析対象に含みたい。さらに、観衆だけでなく、俳優を目指す若者の姿や、他都市からウィーンとの契約を求めて集まる俳優の意識なども分析に含むことで、ウィーン内外におけるウィーンの劇場の社会的・文化的あり方をより多角的に論じたい。
- ・本論文は上演内容を主に言語で分け、「ドイツ語演劇」は大きく二つ（笑劇ないし滑稽劇と、北ドイツ発祥の芸術性や真面目さを強調した市民劇）に大別したのみであるため、人々の詳細な趣味のあり方を検討するには、上演内容をより細かく分けて論じる必要があると考えられる。特に、19世紀には、ウィーンのみならずオーストリアの「国民演劇」とも言うべき存在にまで広く浸透するのは笑劇であり、それも様々なジャンルに分かれる。それゆえ、本論文の扱った18世紀後半の舞台芸術の市場化の中で笑劇に類する諸ジャンルが如何に観衆の支持を集めるようになったのか、という点は本研究の今後の展開のために重視すべき重要な議論のポイントになると考える。

以 上